

一粒の麦

(金久昌業「北山に入る日」所載)

手元に小さなパンフレットが残っている。B5版二つ折り4ページガリ版刷りの粗末なものだが、表紙は3色刷りで山の絵のカットの下に「アマチュア山の会 北山クラブ」とある。

見開きページは「同好の皆さんへ」で始まる会の趣旨が書いてある。「・・・私達同人は二三年前も前から山の会を作りたいと念願しておりました。むづかしい山の理論や登高の技術云々というのではなくして自由に山にしたしみそれによって喜びが味わえるようなごく平凡な集いが持ちたかったのです。・・・会長が会を統率するのではなく会長もまた会員であり会員が皆でよりよい会をつくり上げて行きたいものです。・・・」

4ページ目は「北山とは」と題して北山の定義が示されている。「雲ヶ畑、周山、鞍馬、大原の四つの街道によって入ることが出来る。東方は比良山系と敦賀街道をへだてて分たれ、西方は丹波高原と接して鬱々たる山波を北方に展開し、若狭に至る地域である」 そのあとに続くのが山の会の発会趣意書としては例を見ない次の文である。「・・・はげしい登高の目標ではなくして自然に融合する親近性を包蔵しているなつかしき山々である・・・亭々とそびえたつ杉の大樹の連なり、その下を流れるリズムカルなせせらぎ、その清澄。さっと刷いたように通り過ぎて行く北山しぐれの興趣。谷をつめれば、水かれて、消えかけた道をたどってほっと行きつく峠の展望。日が落ちれば月明の谷を下るもまたよし・・・」

これは1957年9月に開かれた北山クラブ発会集会で配布されたもので、末尾の文学的表現は北山に対する金久昌業さんの心情の吐露と考えられる。

私の北山クラブとの繋がりには「アマチュア山の会発足」予定を伝える小さな新聞記事に始まる。何気なく眼に留まった数行の予告を見て、この集会に行ってみようと思った私は20歳の学生だった。

私の山登りは16歳の槍ヶ岳に始まる。小学校卒業時の担任だった北村敏夫先生に「君たちも高校生になったのだから、北アルプスに連れて行ってあげよう」といわれて、燕岳から槍ヶ岳縦走に参加した。漠々たる雲海の彼方から現れる太陽、朝日に輝く遥か彼方の槍、地上にこんな世界があったのかと感動したのが最初だった。それから、白馬、富士、木曽駒、金峰などに登り、なんのなく山の経験を積んだ気になっていた時期である。

初集会当日、東洞院二条上るの平松さん2階座敷に集まった30人余の大半は学生だったし、堅苦しい演説は無く、趣意書の通りに自由な発言が奨励されて私も好きなことを喋ったような記憶がある。私は体育会系ではなく、山が好きとはいえ山岳部に入ろうなどと夢にも思わなかった。当時

は軟弱な文芸部なんかに所属していたと思う。だから金久さんの目指す北山クラブの性格が性に合っていたのだろう。

初集会の直後に10月1日発行の会報 No.1が送られてきた。巻頭に「発会の辞にかえて」が載っている。先のパンフレットとは一転して強い調子で、明治以来の西欧啓蒙主義の流入によって日本人と山の関係が変化し登高の概念が変わったと世の風潮を嘆く。それは「山と自己との截然たる分離であり自然への挑戦である」とし、近代アルピニズムの偉業としてヒマラヤの峰が征服されたことは認めるが「高名の山に登るのが能ではない。無名の山であつても又標高の低い山であつてもその山の価値を理解できる眼を養うことが肝要である。北山如何に低山にして華美なる景觀無きと雖も諸氏よ決して愧ずること勿れ。アルプスの峰をいたずらに数多く跋涉するを以って誇りとする輕薄の徒こそあわれではないか」

性急とともれるこの発言は、その頃の山岳界の有り様に金久さんが苛立っていた証左だと思う。当時は「より高く、より困難」な山を目指すのが大多数の山岳会の目標だった。

1950年アンナプルナ、1953年エベレスト、ナンガパルバット、1954年 K2、チョオユー、マカルー、そして1956年に日本隊のマナスル、同年ローツエ、ガッシャーブルム II、1955年カンチェンジュンガ、北山ク発足の1957年はブロードピークと、ヒマラヤの8000m峰が次々と登られ、残るはガッシャーブルム I、ダウラギリ、ゴサインタンゴサインタンの3座となり、世界の登山先進国として8000m 峰初登頂の栄を得たいと、それまで長蛇を逸していたアメリカを筆頭に各国が鎬を削っていた。

日本国内でも、1957年初頭では未だ未踏の岩壁が幾つも残っていた。谷川岳一の倉沢の衝立岩正面、滝沢スラブ、コップ状岩壁正面、北ア屏風岩中央カンテ、北穂滝谷 C 沢右股奥壁など、先鋭アルピニズムを標榜する社会人山岳会の精鋭たちが激しく初登を競っていた。

1956年2月から57年8月に掛けて朝日新聞に連載された井上靖の小説「氷壁」は、この時勢を背景に、前穂東壁の冬季初登攀を目指す二人パーティーの一人が、切れないと言われていた新素材のナイロンザイルが切れて墜死するという事件を中心に、登山と人間を描いて評判になり、ちょうど北山クラブ発足頃には新潮社から出版された。

この潮流に棹さしてアンチ・アルピニズムを唱えた金久昌業さんはまことにマイペースの人であった。のちに会報100号記念号で当時の思いを語っている。「世はあちらを見てもこちらを見ても山岳会といえばアルピニズムの会ばかりであった。こうした風潮の中でもっと素直に本当の日本の山の姿を見てゆこうとする同好の士が欲しかった」といい、思い描く北山クラブの構図は「個人で成し遂げるべき芸術的追求の方法をクラブという集団で果たそうとするのが夢である」と述べている。そ

の夢の実現の困難さは「発会当時の99対1という違和感(もちろん1は私である)は大分薄れてきたが、今日に至るまで両者のギャップは大きく、私は出来るだけその間隔を縮めて行こうと思った」という述懐に示されている。

北山クラブ山行例会第1回は、1957年10月13日に A コース「沢の池・菖蒲谷池」金久昌業(L)以下10名参加、B コース「安曇川源流」井上龍吾(L)以下9名参加で実施され、私は B コースに加わった。この山行で長い付き合いになる古家邦文さんと出会った。

順調に船出した北山クラブだったが、巡航に入るまでには課題も多かった。横の繋がり無しに突然に集まった人間の集合体であるから考え方の違いや山への思いの差異は大きかった。会報の巻頭で「胸襟を開いて自由に山へ行こう」(No.3)「自然に帰れ」(No.5)と繰り返し金久会長が一致団結を呼びかけている。それでも例会、集会を重ねてゆくうちに次第に融和が進み、会長宅が学生会員の梁山泊になるような状況にもなった。もちろん、来る人は拒まず去る人は追わずの会長方針で出入も少なくなかったがクラブの基礎は固まっていた。

北山クラブに入った私は、山は知っていると思っていた自分の不明を恥じることになった。それまでに体験していた私の山登りは道標にしたがって登山道を歩くだけのものだった。登る山を決め、登路をさがし、道が無ければ谷をつめ、藪をこぎ、地図を読んで行く手を探り、自分の力で頂上に達するのが登山なのだと初めて知った。それは新鮮な驚きであり喜びだった。北山は私の修行の道場になり、大いに歩き回った。

1959年4月に私は社会人になり北山クラブでの活動はやや低下したが、それが決定的になったのが1972年8月の東京への転勤だった。遠隔地会員として例会参加は不可能となったが、1等三角点行脚を続けておられた山本久和さんとは中部・関東の山に登られる時にはご一緒したし、その後に東京へ出てこられた宇都紘一、竹田善英、北山幸司さんらと関東一円で山行を続けた。

1982年2月、金久昌業会長が亡くなった頃には北山クラブは最盛期を迎えていた。亡くなったのが16日。その5日後の2月21日(日)に三つの例会が実施されている。2726回例会「鞍馬尾根」坂田謹爾(L)以下11名、2727回例会「経塚」尾高一郎(L)以下13名、2728回例会「地藏山」大伴光栄(L)以下10名と、一日の例会山行に一举30数名の参加は見事である。北山クラブの例会はリーダー個人の企図の実現であるから、金久さんが夢見た「個人の芸術的追求を集団で成し遂げる」構図がようやく出来上がったのだ、と私は考える。その意味では、年齢的には早すぎた金久さんの逝去だったが、北山クラブ創設時の志は果たされたのだと思う。

創設から25年で北山クラブは統率の支柱を喪失したが、それからさらに29年間揺ぎ無く存続した

のは創設者の志が継承されたからである。私が会長死去5日後の例会山行の詳細を書くことが出来るのは会報「北山」のお陰である。会報294は1982年2月18日発行とあるから会長死後2日目である。翌月3月18日発行の会報295に金久千津子さんの「会員の皆様へ」が載っている。

「・・・私達夫婦には子供がなく、私は主人が何時までも私の傍に居てくれるものと信じていました。それが急に此の世から消えてしまい今の私は只茫然としています。私達の生活31年の間に北山クラブが25年、その間に犬の次郎が20年同居していました。犬も去り、主人も去り、そして私に残されたものは北山クラブだけとなりました。指導力も無く、何事につけても主人の足下にも及びませんが、私なりに理解していた主人の意思を継いで北山クラブのお世話をして行きたいと思えます。会員の皆様も協力してやろうと申されますのでそれに甘えてこのまま続けて行こうと決断いたしました。・・・」

294号も295号も編集・発行は金久千津子さんの仕事である。配偶者の死という人生最大の不幸の最中であって会報発行業務を遂行された気力と使命感に感嘆する。その上でのクラブ運営継承宣言である。これは千津子さんにとっての戦であったろう。涙どころか一瞬の遅滞も許されない戦場での指揮権継承宣言に他ならないと思う。協力を申し出られた会員はたくさんいらっしやったであろうが、その中心は山本久和さん、尾高一郎さんらであったろう。山本さんは早くに亡くなったが、尾高さんは最後まで協力を惜みず、2011年1月北山クラブ最終の5173回例会を主宰され、会報最終642号にレポート「高円山」を載せられた。発足時会員で、54年間一貫してクラブの中心にいらっしやった尾高一郎さんはまさに稀有のひとである。千津子さんも宣言通り、295号に予告した4月18日2747回例会「処女湖・川上平」を主宰され20名の参加をみた。継承の心は会員間にも広がっていたのであろう。

半世紀に及ぶ北山クラブの歩みの背後で、登山界にも大きな変化が生じていた。ヒマラヤのジャイアンツ14座が総て登られ、日本国内でも未踏の岩壁は無くなり、先鋭アルピニズムはパイオニアワークの目標を失った。なおもより困難なルートを探し、冬季、無酸素、単独などバリエーションでパイオニアの道を追う人たちもあつたが、それはややマニアックな姿であり、全体を方向づけるものとは言い難かった。やがて登山のブームは去り、各大学の山岳部も新入生の勧誘に困難を来すようになり、遂には廃部の運命に陥ることも珍しくなくなった。

変わって登場したのが商業化登山である。ヒマラヤですら公募隊と称するツアー登山が繁昌し、今では、高度に耐え得る体力と数百万の資金さえあれば誰でもエベレストに登らせてもらえるという。日本でも国内、海外を問わず様々な山へのツアーが組まれている。北山を歩くツアーも存在する。山を歩いていると必ずツアーの団体に出会い、長い行列とすれ違うのにうんざりすることもある。

る。

アンチ・アルピニズムをとなえた金久さんなら、きっとツアー登山にも異議をとなえたであろうと思う。山登りは個人が成し遂げるべき芸術的な追求であり、添乗員やガイドに総てを頼る山登りは先生に引率された小学生の遠足であって登山ではない、と主張されたであろうと考える。

結局のところ、金久昌業さんは「一粒の麦」だったのだ。それは地に落ちて北山クラブという畑たくさんの芽を吹き、その芽が育ち、無言の主張の趣旨を感得した人たちが輩出して導き、北山クラブは時勢に流されること無く山登りの本道を歩んできたのだと思う。以下は蛇足であるが、その後の私のことに少し触れさせて貰う。

1991年6月から1993年10月まで大阪勤務になった私は、この期間に北山クラブの例会にも参加できた。その例をあげれば、赴任直後の8月にヒノコ的小屋で開かれた北山合宿では、金久千津子会長や合宿の総括リーダー尾高一郎さんらと19年ぶりに再会した。翌年2月の3378回例会「三方ヶ岳」(伊藤久雄 L 以下8名参加)では久しぶりの湖北の新雪ラッセルに感動した。この例会で公庄佳子さんと出会った。秋の3728回例会「長老ヶ岳」(緒方登摩 L 以下9名参加)では小林直人さんと再会した。この例会の報告を私が書いたのだが、その報告の中に19年ぶりの北山と、再会した人々に纏わる感想が古い映画「舞踏会の手帳」(ジュリアン・デュヴィヴィエ監督1937年作品)に事寄せて触れてある。「この映画のテーマは、年年歳歳人同じからず、に他ならない。20年ぶりに訪ねてみたら人は皆すっかり変わっていた物語である。ところが幸いなことに私の場合は、変わらない筈の山がすっかり変わってしまい、変わるはずの人が変わっていなかった。映画同様に20年もの時空を超えての再会も、肉体的加齢を相互の風貌に認めることは避けられないが、いささかの違和感も無く気持ちの触れ合いが生じる嬉しさをどう表現すればいいのか。年齢、職業が異なり、住所は遠く、音信途絶えて久しく、ただかつて山を媒介した接触があったということだけで、人は友情を持ち続けることが出来るのである」この大阪勤務で古家邦文さんとも再会し、その紹介で日本山岳会に入会した。

かつては日本のアルピニズムの総本山だった日本山岳会も会員の高齢化と減少に悩んでいた。日本山岳会で私が所属したアルパインスケッチクラブは、山とスキーと絵が一緒に楽しめる誠に居心地のいいグループで、北山クラブに似て私と相性が合った。とはいえ、メンバーはヒマルチュリ初登頂者、何年度のヒマラヤ登山隊隊長など錚々たるもので、各大学の山岳部で正規の登山修行を積んだ人ばかり。言ってみれば北辰一刀流、新陰流、神道無念流などの達人の中に迷い込んだようなもの。私は流派を問われれば(問う人はいないが)北山流と答えようと思っている。間違いなく北山道場で修業したのだし、そこで積んだ山の知識と経験は十分通用しているから。

宇都さん、竹田さんは関西へ戻られたが、東京に定着した北山さんとは今も折りにふれて山登りを続けている。今年(2013)8月に深田百名山で登り残していた南ア光岳に登った。単独行になるかなと思っていたら、公庄佳子さんが一緒に登りたいと申し出てくださって、7年ぶりに再会し、二人で百名山完登の祝杯を挙げる事が出来た。この山行直後に誕生したお孫さんの世話から手を引く時期がきたら、東北の山に登りましょうと公庄さんとは遠い約束が出来ている。こうして途切れ途切れながら、私は北山クラブの流れをもつ山行を続けている。

もう一つ付け加えれば、「山に連れてって」と孫がやって来ると出かける。小6の金時山から始めて、中1では、丹沢表尾根でアップダウンのある縦走を、男体山で標高差1200mの1日往復を体験させた。1月の蛾ヶ岳で雪を踏ませようとしたが暖冬で雪が無く純白の南ア連嶺を見せて終わった。中2になって大菩薩では山の美しさを感じ取らせたから、今度は三つ峠からの富士を見せようか、そろそろ山小屋に泊る山行に連れてゆこうかと考えている。そのうち地図の読み方も教えたい。受験もあるし、興味も変わるだろうが、「連れてって」と言っている間に北山流を出来るだけ次世代に伝えたいと考えている。